

リビングラボで拡 がる地域の可能性

共に創り、共に生きる社会へ

2026年3月12日

健都共創フォーラム

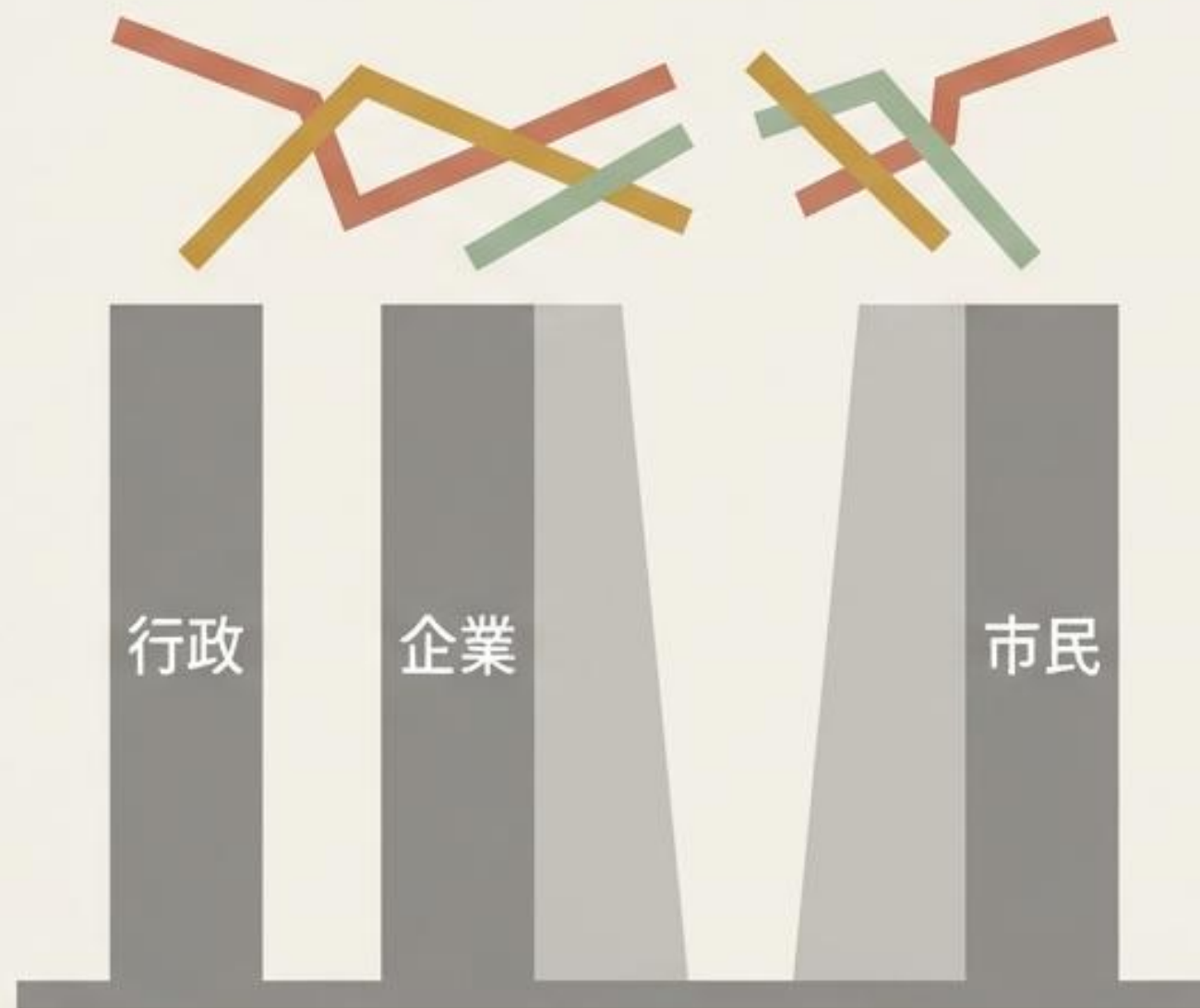
国立研究開発法人医薬基盤・健康・栄養研究所

吉武 徹



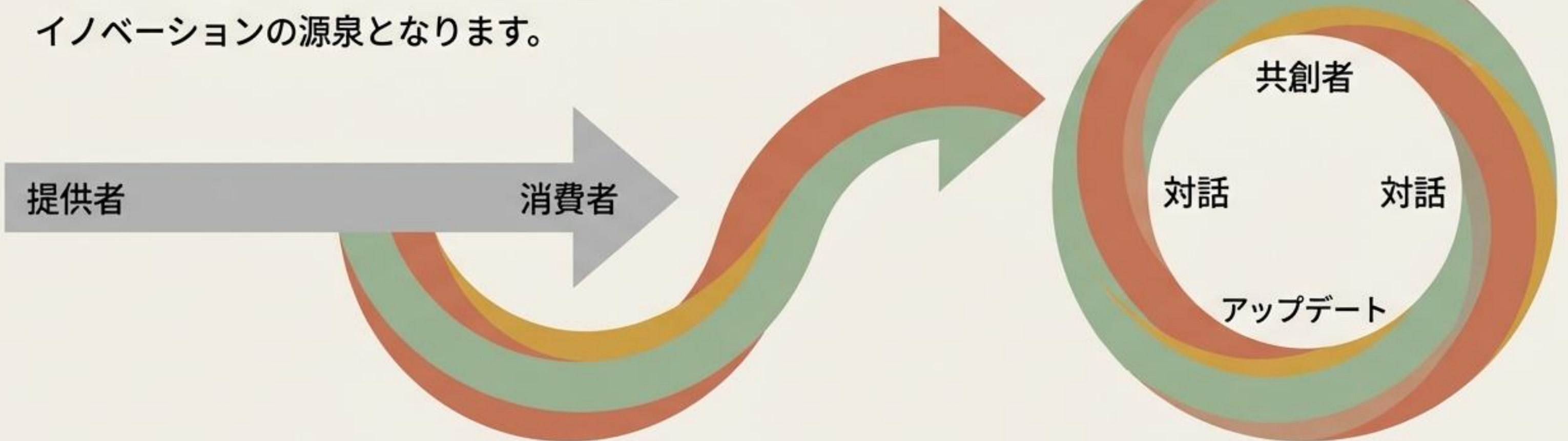
限界を迎える「これまでの課題解決」

- 人口減少、高齢化、デジタルデバイドなど、成熟社会が抱える課題は複雑化しています。
- 行政の政策や企業のサービス単独では、もはや根本的な解決に至らない時代に突入しました。
- 縦割りのアプローチやトップダウン型の施策では、地域社会の真のニーズに応えきれません。



「つくる権利」を市民へひらく

- 作る人（企業・行政）と使う人（市民）が分断されていた工業化社会から、共に創る成熟社会へのパラダイムシフト。
- 市民を単なる「消費者」や実証実験の「被験者」として扱うのではなく、対等な「共創者」として位置づける。
- 生活のプロフェッショナルである市民の気づきが、イノベーションの源泉となります。

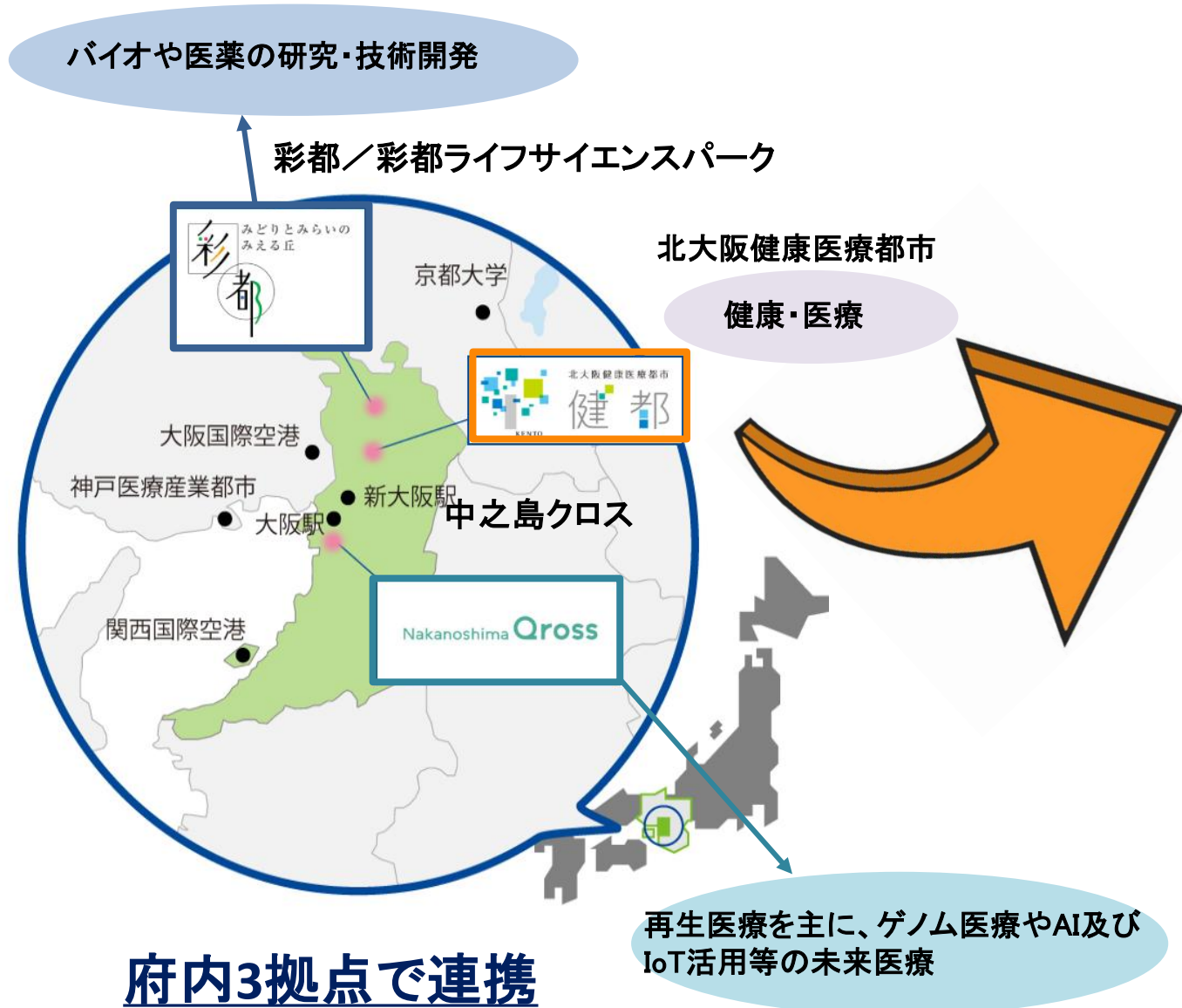


健都のここが他とは違う！ ～産官学民によるまちづくり～

- ▶ 大阪府内には3つのライフ・サイエンス分野のクラスターが集積！

それぞれの拠点が連携し合い、大阪一丸となって特徴的な産業拠点形成に取り組んでいる。

< 大阪府内の3拠点と重点領域 >



北大阪健康医療都市(健都)の強み

* 健都では、産官学だけではなく市(or住)“民”が参加した“産官学民”によるまちづくりを進めている。

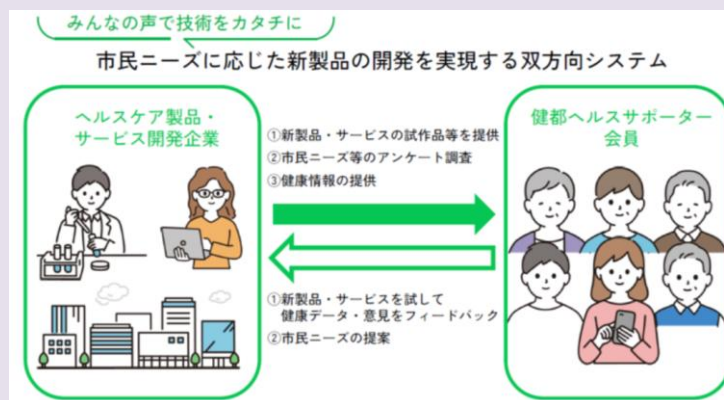


- ・健康と医療をコンセプトにしたまちづくり
- ・研究機関、医療機関、企業の他に公園やウェルネス住宅等もあり、住民も取組に参加しやすい。

Knowledge (正確な知識、知の集積)
Exercise (適度な運動)
Nutrition (適切な栄養・食事)
Town (まちづくり)

“民”が参画する仕組みづくり

健都ヘルスサポーター(LINEを活用した会員制度)



- ・市民は企業・研究機関が新たに開発した製品・サービスを体験し健康づくりに役立つ。
- ・企業・研究機関は、商品を出す前にユーザーの反応を確認しより良い開発が可能。

健都における『地域実証事業』

- ・エア・ウォーター健都 地域の秋祭りで老化物質『AGEs』測定会の開催
- ・兵庫医科大学×グンゼスポーツ 吹田健都 呼吸筋力・呼吸機能・骨格筋量等の運動習慣の関連性を明らかにする研究
- ・サンスター株式会社 お口の渇きを実感している方を対象とした実証実験
- ・大阪大学大学院歯学研究科 「子ども・健口(けんこう)スタンプラリー」



民との連携が必要な背景／重要性

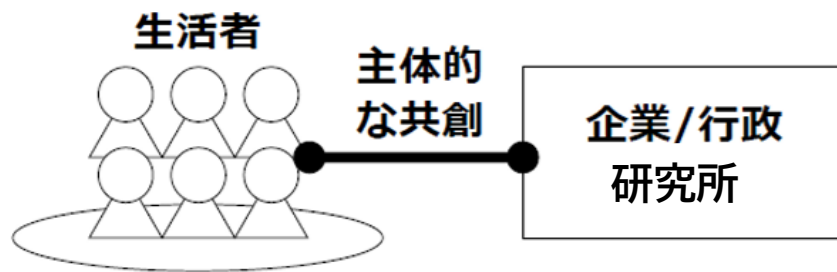
社会背景の変化

- ・少子高齢化・人口減少・グローバル化など地域を取り巻く社会経済環境の変化
- ・研究者の意識変化
 - 学問的な知識の探求に集中する時代
 - 社会的要求に応じて研究成果を社会へ還元する時代
- ・地域課題は、住民の実際の生活に深く根ざしており、外部からの視点だけでは解決が難しい状態。

環境の変化によりこれまでのやり方には限界がある。
研究者や社会実装を目指す上でや、企業が新しい製品を開発する上で、
市民の「気づき」や「生活現場の課題」がイノベーションの起点となる。

- ・身近な課題の再発見
- ・地域のまちづくりへのコミット
- ・新しい知見や出会い
- ・生活のQOLの向上

市民と連携する上でのメリット



- ・市民との関係構築
- ・自社の製品のアンラッピングの実施が可能
- ・新しい気づき・ビジネスの発見
- ・解決案の社会実装

フラット＆学び合うパートナー関係を構築し、社会の変化に柔軟に対応できるようになり、新たな価値が創造できる。

持続的な地域の発展・イノベーションの創出が可能になる！

持続可能な開発目標(SDGs)

- 2015年9月の国連サミットで全会一致で採択。「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現のため、2030年を年限とする17の国際目標。(その下に、169のターゲット、243の指標が決められている。)



- 普遍性** 先進国を含め、全ての国が行動
- 包摂性** 人間の安全保障の理念を反映し「誰一人取り残さない」
- 参画型** 全てのステークホルダーが役割を
- 統合性** 社会・経済・環境に統合的に取り組む
- 透明性** 定期的にフォローアップ

前身:ミレニアム開発目標(Millennium Development Goals: MDGs)

- ▶ 2001年に国連で専門家間の議論を経て策定。2000年に採択された「国連ミレニアム宣言」と、1990年代の主要な国際会議で採択された国際開発目標を統合したもの。
 - ▶ 開発途上国向けの開発目標として、2015年を期限とする8つの目標を設定。
(①貧困・飢餓、②初等教育、③女性、④乳幼児、⑤妊産婦、⑥疾病、⑦環境、⑧連帯)
- MDGsは一定の成果を達成。一方で、未達成の課題も残された。
 極度の貧困半減(目標①)やHIV・マラリア対策(同⑥)等を達成。
 乳幼児や妊産婦の死亡率削減(同④、⑤)は未達成。サブサハラアフリカ等で達成に遅れ。

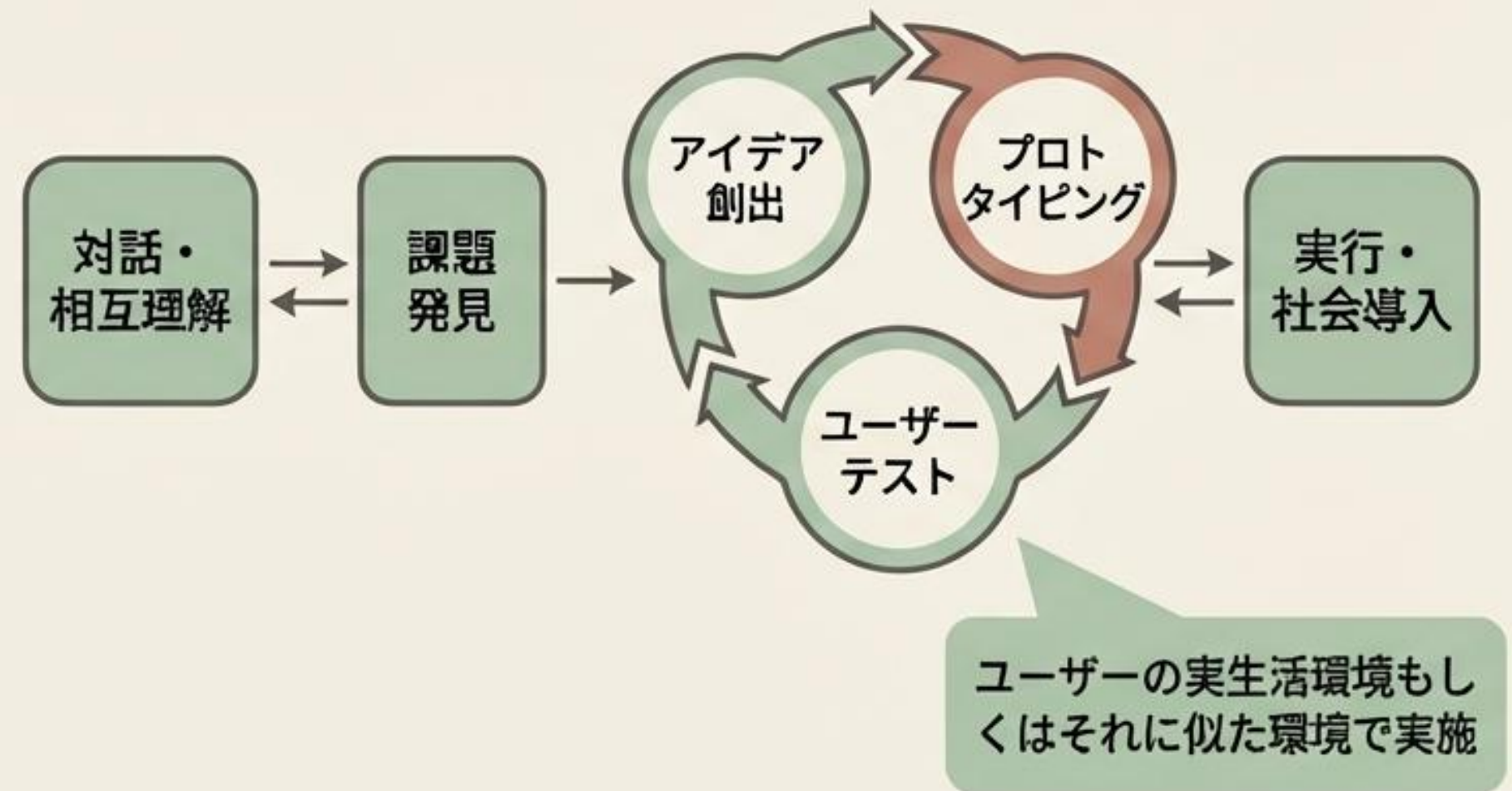
パートナーシップで目標を達成しよう

チャレンジングな目標を定め、そこから逆算し取組を検討し、さまざまなプレイヤーで解決することこそがSDGs。

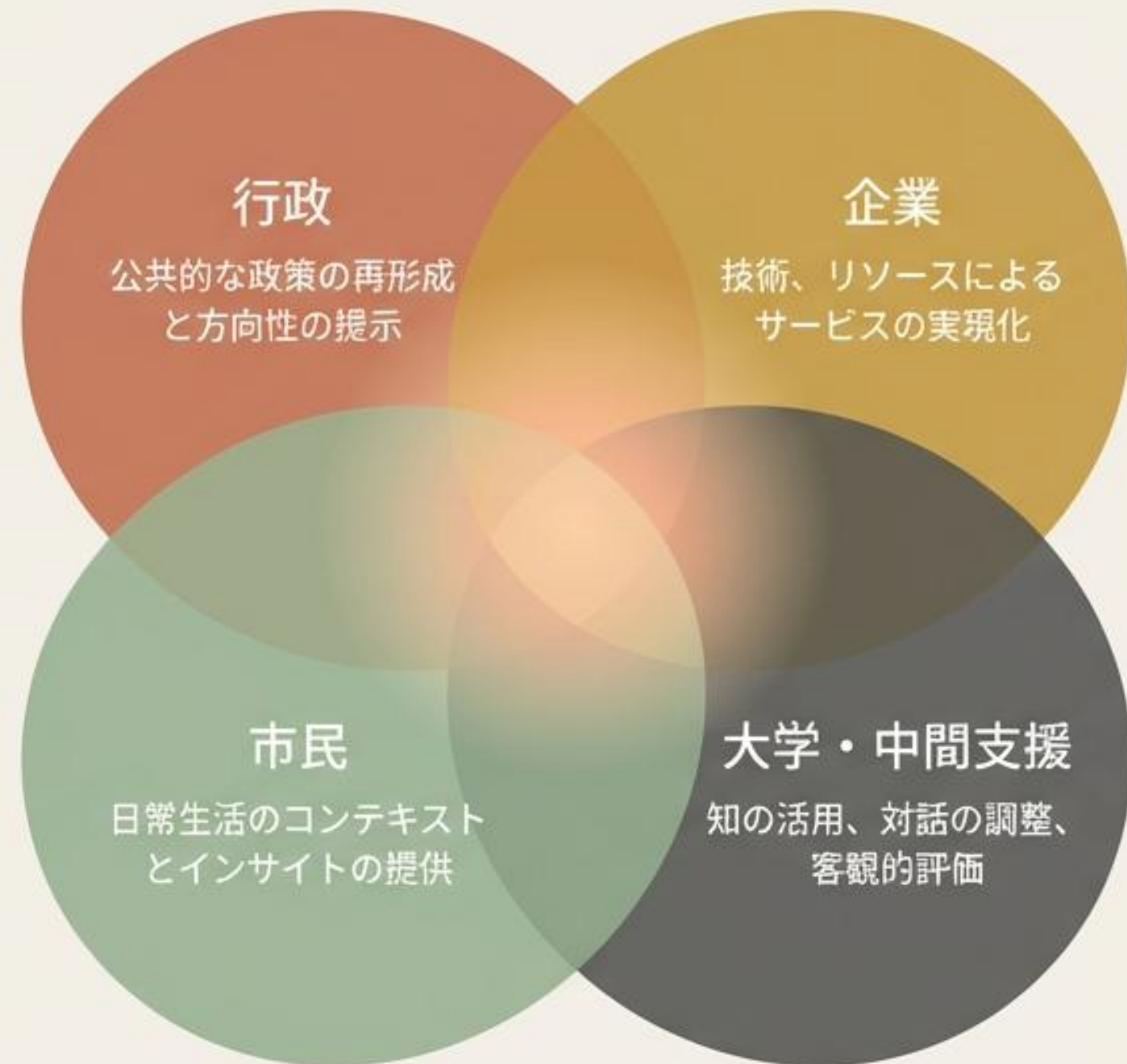
「産官学民」各セクターがフラットな関係性で、相互理解し、共創することが大切である。

生活空間で共創を生み出す「リビングラボ」

- 「Living（生活空間）」と「Lab（実験場所）」を融合させたオープンイノベーションのエコシステム。
- 当事者を初期段階から巻き込み、実生活環境の中でアイデア創出、プロトタイピング、検証のサイクルを回します。
- 一過性のワークショップではなく、持続可能な価値を構築する仕組みです。



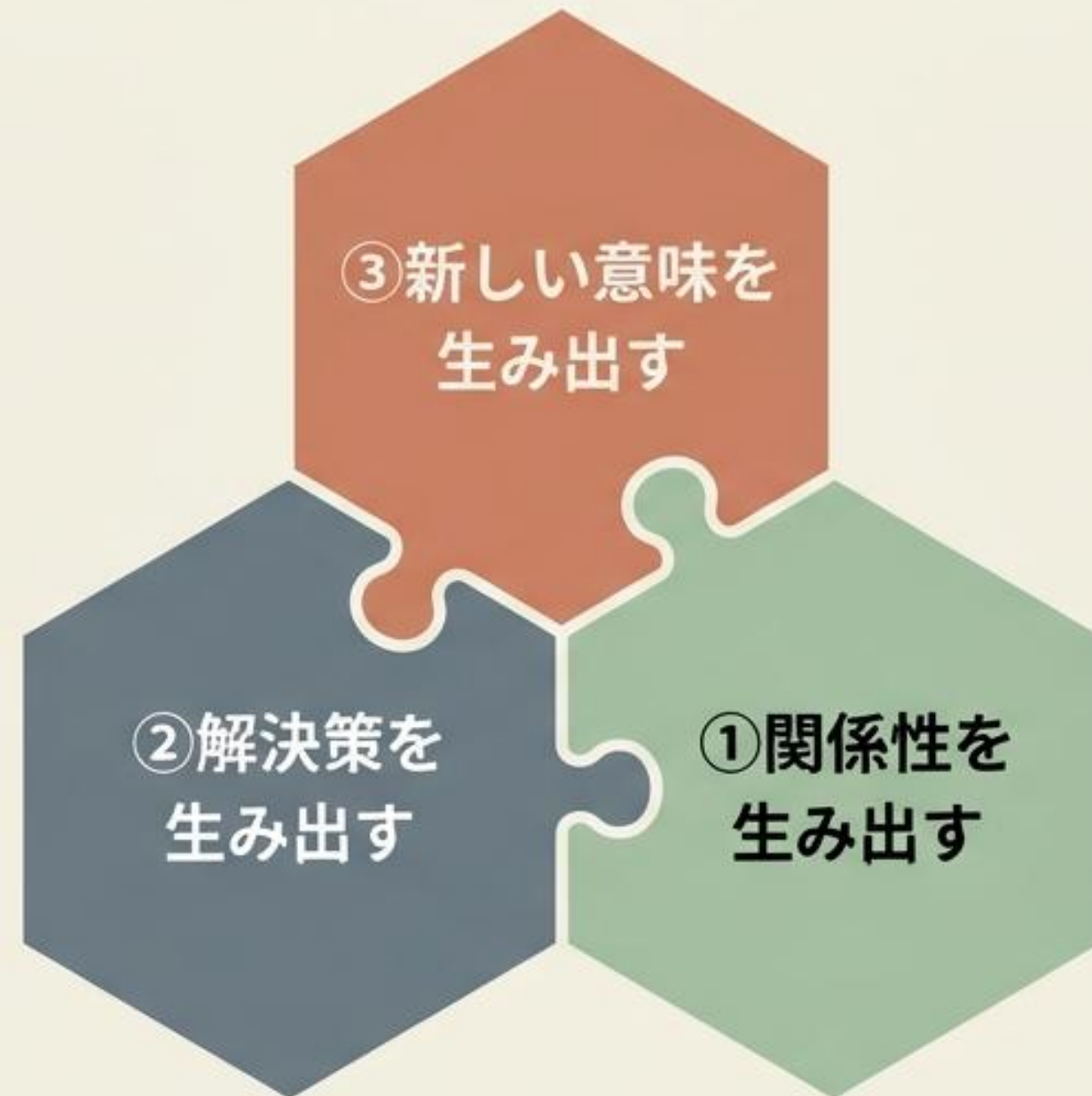
産官学民が交わる「4重螺旋」モデル



大学・中間支援
知の活用、対話の調整、
客観的評価

リビングラボが生み出す3つの価値

- リビングラボの成果は、単なる製品開発にとどまりません。
- 活動を通じて、地域社会に3つの段階的な価値をもたらします。



① セクターを越えた「関係性」を生み出す

- 課題が定義される前から、継続的な対話の文化を育む。
- 普段は交わらない多様なステークホルダーが、心理的安全性の高い「サードプレイス」で繋がる。
- このインフォーマルな信頼関係のネットワークが、すべての共創の土壌となります。



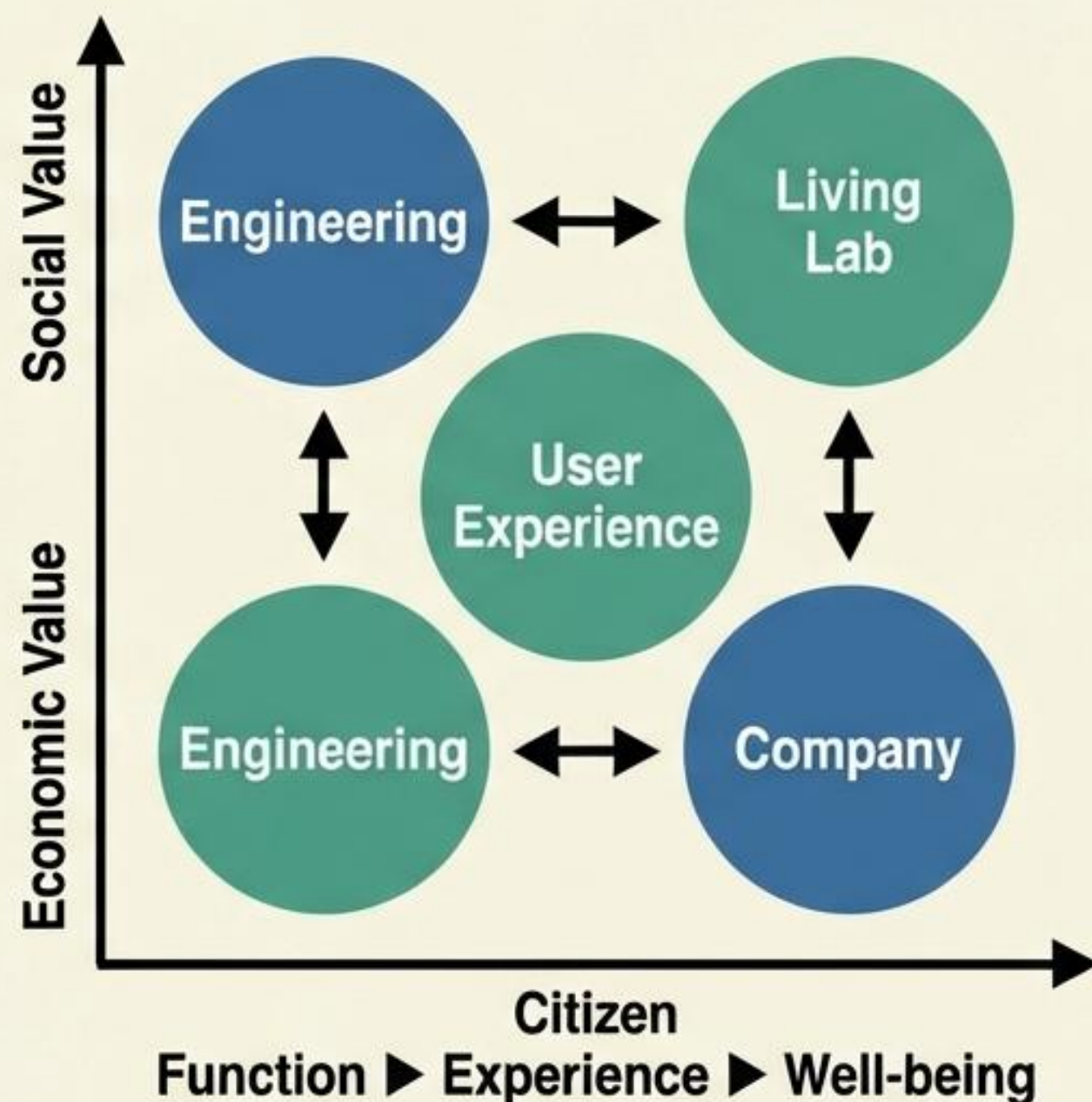
② 実生活の中で「解決策」を生み出す

- 実験室での「有効性」ではなく、複雑な実社会での「実効性」を追求する。
- プロトタイプを生活のコンテキストに落とし込み、住民と共に迅速にテストと改善を繰り返す。
- 作り手の思い込みを排除し、本当に使われ続けるサービスを実装。



③ 地域における「新しい意味」を生み出す

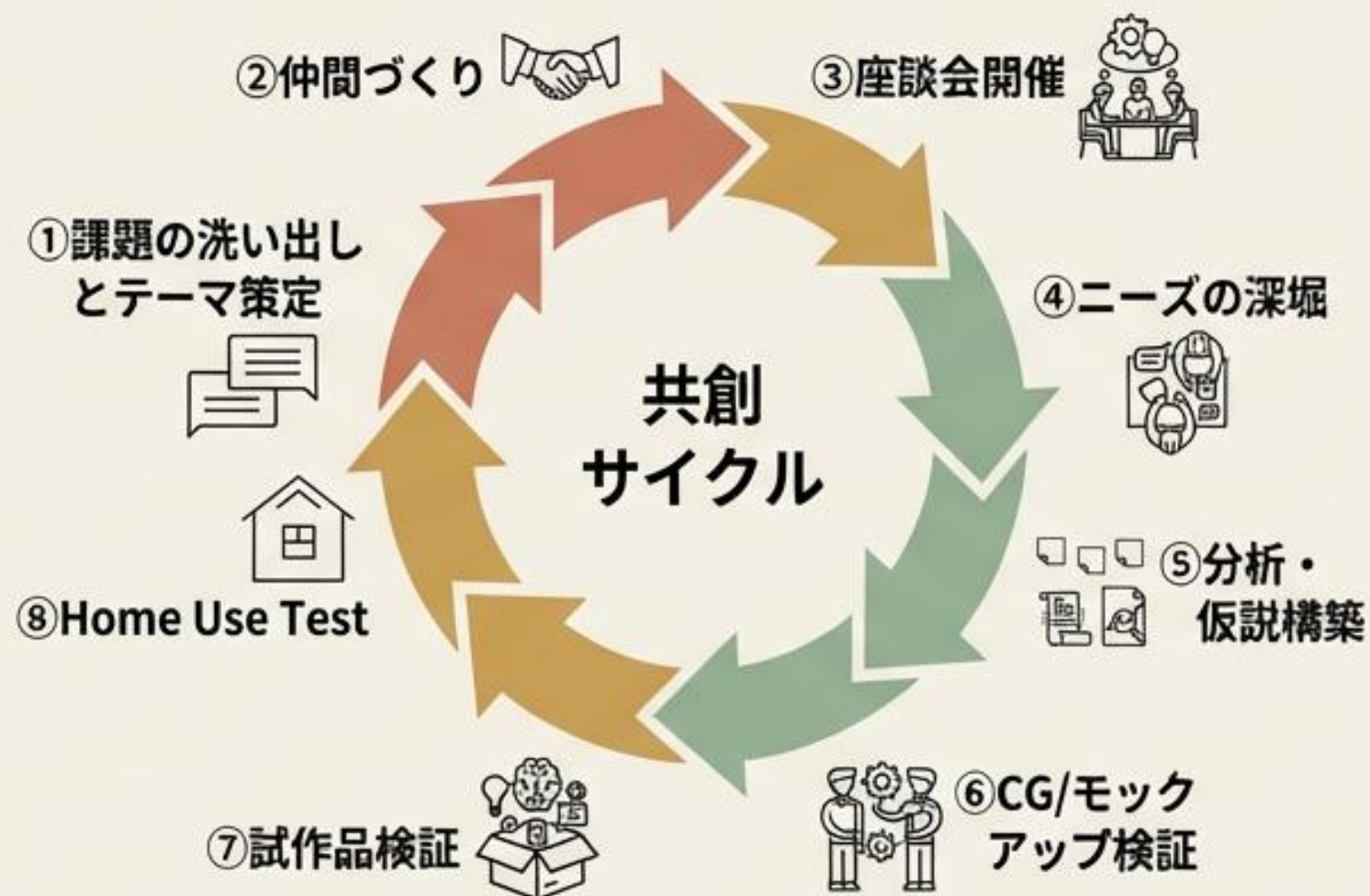
- 目先の課題解決（マイナスをゼロにする）を超え、「地域にとっての豊かな暮らしとは何か」を再定義する。
- 経済的価値や機能的価値から、ウェルビーイングや社会的価値への昇華。
- 急進的なイノベーションと、新しい地域文化の創出をけん引。



実践事例：鎌倉市と小城市における共創の波

- 鎌倉リビングラボ：高齢化が進む今泉台地区で、「若い人が住みたいまち」を目指し、住民と企業がテレワーク家具を共創。

- 小城リビングラボ：高速道路を起点に、市民・企業・行政が新名物「logi cube」やサイクルツーリズムを開発。行政職員自身がファシリテーターとして成長。



実践事例：大牟田市が描く新しい意味

- ・大牟田市：「パーソン・セントード・ケア」を基盤に、認知症の人も地域で自分らしく、暮らせる社会を目指す。
- ・単なる介護提供を超え、地域全体の意識を変革し、認知症の人にとっての「新しい意味」のある暮らしを再定義する挑戦。
- ・官民連携で、全ての住民が共に生きる持続可能な地域経営モデルを構築し、地域全体のウェルビーイングを追求する実践例。



産官学民による共創プラットフォーム「健都共創フォーラム」

健都共創フォーラム



目的

多様な健康・医療関連の共同研究やサービスの社会実装と、市民の無関心層を含めた行動変容の実現。

仕組み

地域（住民、事業所、施設）と行政が一体となり、実証フィールドを提供・活用する。

試行的研究会

産学連携・地域実証のエンジンとして複数のテーマ別研究会・WG（ワーキンググループ）が発足。

4つの主要研究会とこれまでの地域実証・取組内容

運動マネジメント研究会



Goal: 無関心層の意識・行動変容とコミュニティ形成。

- 大阪経済大学 高井PJ: 自治会長など地域キーマンを通じたレールサイドパーク遊具の効果的活用と促進。
- コミュニティ融合: 継続的な運動機会を通じた分断コミュニティ（新旧住民、吹田・摂津）の交流醸成。



オーラルヘルス研究会



Goal: 国内で稀有な「オーラルヘルス」に特化したクラスターと実証フィールドの形成。

- オーラルフレイル改善プラットフォーム: 検知、検査、予測から予防、トレーニングを統合するシステムの構築。
- 中核機関連携: 産学が結集し、次世代の口腔健康エコシステムを推進。



まちかど保健室研究会



Goal: リビングラボ拠点機能としての物理的スペース形成と継続的なコミュニティエンゲージメント。

- 認知症cafe-PJ: 予防情報、医療連携、家族信託や保険のソリューション提供の場。
- 多様なテーマ展開: オーラルフレイルcafé、抗疲労café、睡眠café、栄養caféなど、身近な地域タッチポイントの創出。

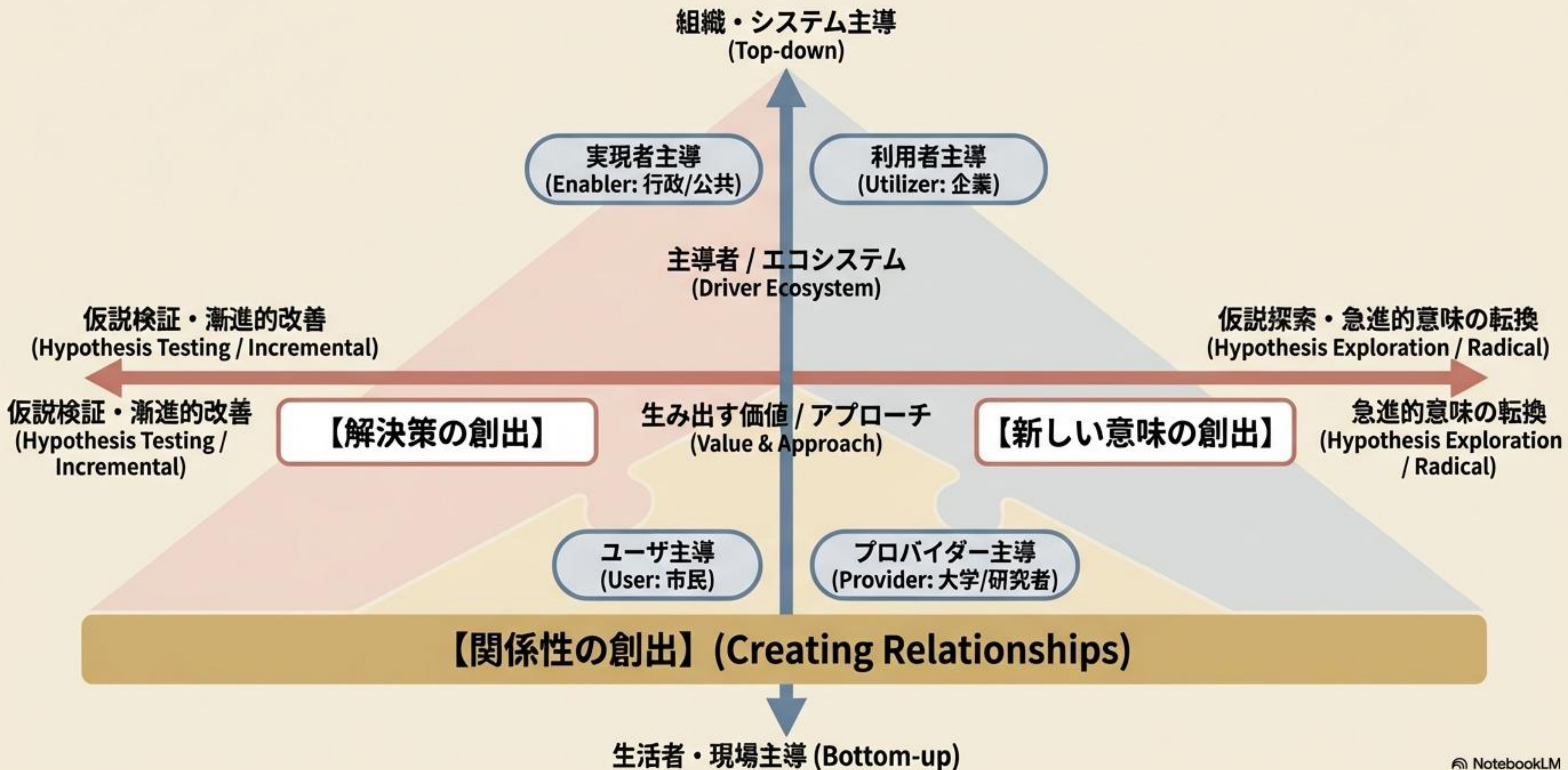
医療のエコ活動研究会



Goal: ソーシャルマーケティングを通じた、地域社会の合意形成と共創支援。

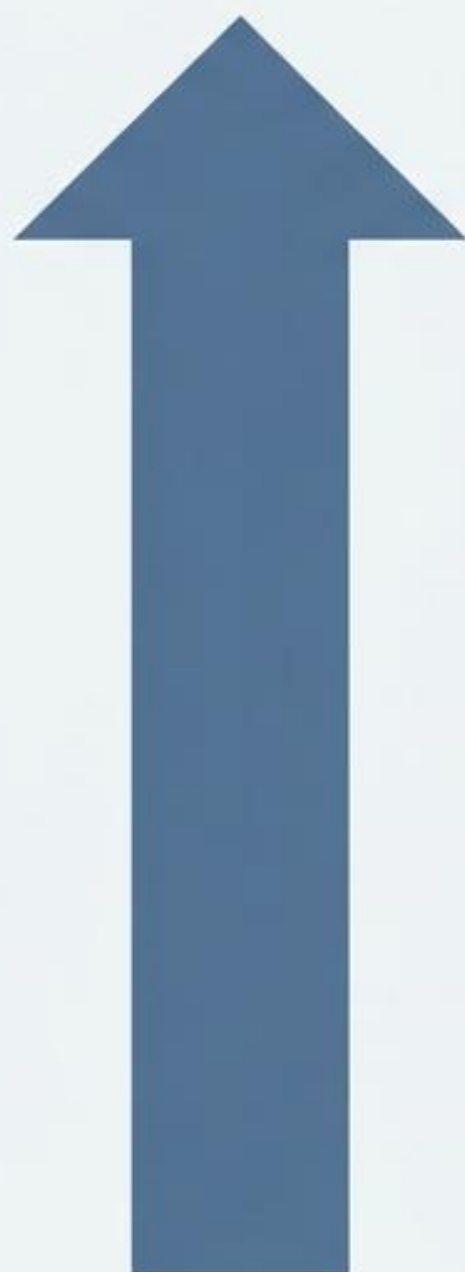
- 同志社大学PJ連携: 「朝食PJ」や「人生会議PJ」を通じた市民への啓発活動。
- 社会との対話: リビングラボの運営や地域共創に対する理解を深めるためのソーシャルコミュニケーション手法の開発。

リビングラボを統合する「類型マップ」



縦軸の解剖：「誰が」この場をドライブするのか？

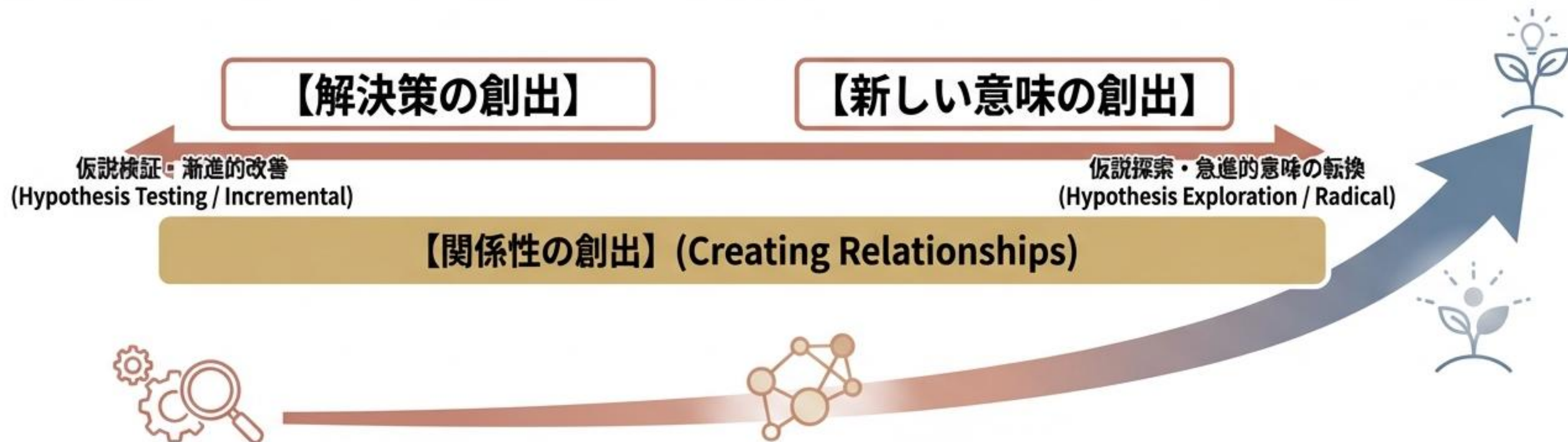
世界のリビングラボ研究（Leminenら）に基づく4つの主導者類型。誰が起点となるかで、場の力学が変化します。



- **利用者主導 (Utilizer-driven)**: 企業が自社のビジネス開発や製品・サービスのテストを推進するために利用する。
- **実現者主導 (Enabler-driven)**: 地方自治体や公共機関が、地域の社会課題解決や政策形成を目的として主導する。
- **プロバイダー主導 (Provider-driven)**: 大学や研究機関が、生活向上やオープンイノベーションの知見創出を目的に運営する。
- **ユーザ主導 (User-driven)**: 市民や生活者のコミュニティが、自身の明確な課題や「やりたいこと」を解決するために自律的に運営する。

横軸の解剖：「どのような価値」を目指すのか？

漸進的な改善か、社会システムの転換か。目指す「深さ」によってアプローチが変わります。（木村氏の3分類より）



• 解決策を生み出す (Hypothesis Testing) :

既にある課題に対し、仮説や技術を実生活で環境で検証・改善し、最適解（プロダクト・政策）を創出する。

• 関係性を生み出す (Foundation) :

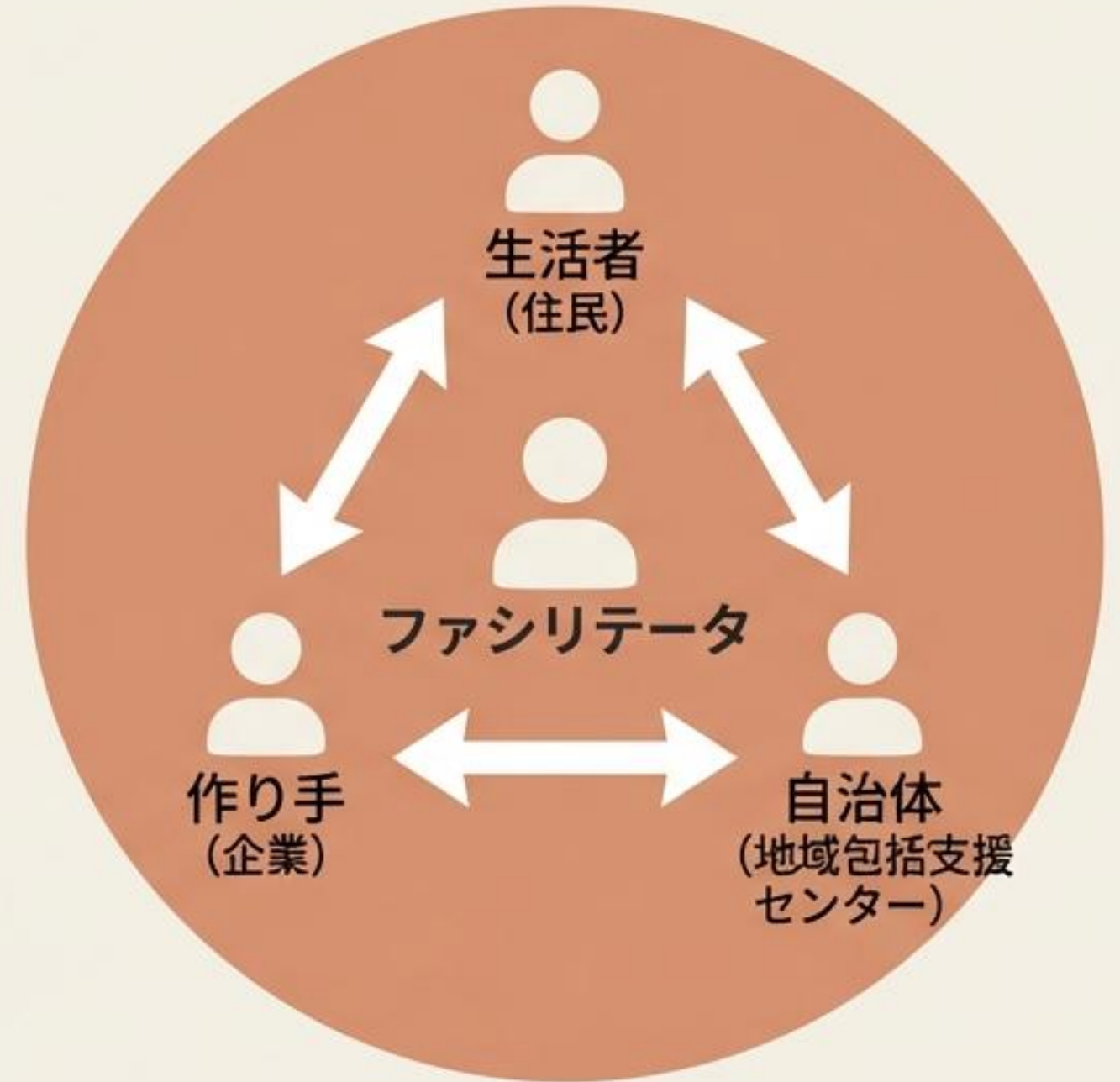
セクターを超え、今まで繋がっていなかった人同士（産官学民）が共創するための土壌・コミュニティを形成する。

• 新しい意味を生み出す (Hypothesis Exploration) :

既存の課題構造そのものを疑い、当事者のリアルな状況から「新しい目的（意味）」を再定義し、社会の仕組みを転換する。

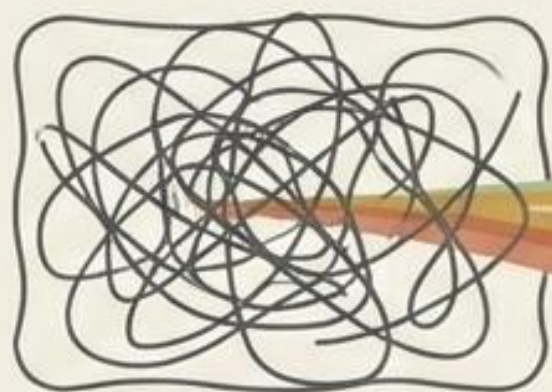
持続可能な共創を支えるファシリテーション

- 異なる目的を持つステークホルダーを繋ぐ「中間支援組織」の存在が不可欠。
- 誰もが本音を語れる心理的安全性の確保と、共創体験（UX）自体のデザインが求められます。
- 対立を恐れず、相互理解へと導く「翻訳者」としての役割。



「課題解決」から「ありたい姿の実現」へ

- リビングラボは、壊れたものを直すためのツールではありません。
- 過去の延長線上にない、私たちが本当に生きたい未来の社会システムをデザインするためのアプローチです。
- 地域の歴史や文脈を読み解き、長期的な戦略へと繋ぎ直す。



Reactive

Proactive Visioning

地域の可能性は、終わりのない対話から広がる

- 単発のワークショップで終わらせず、実践知を共有し、次のプロジェクトへと波及させる。
- 地域全体を「常にアップデートされ続けるエコシステム」へと進化させる。
- 社会の仕組みの中に生活者を内在させる、新しい地域経営のスタンダードへ。





共に創る、 これからの地域社会

あなたの地域に眠る可能性を、対話と共創で解き放ちませんか。
未来をつくる権利は、私たち全員の手にあります。